

川喜田石水の教訓歌

吉丸雄哉

要旨

公益財団法人石水博物館に現在収蔵されている一四代当主川喜田政明（号は石水）の文事のなかから、教訓・道徳を短歌形式で記した教訓歌をとりあげる。川喜田石水の文事は多岐にわたっているが、教訓歌はその筆頭と石水がみなしていた重要な文芸である。石水は出版ができる状態の稿本である『教訓歌選』（館蔵番号一二七―一三）を編纂しておきながら、実際には出版の意図はなかった。これはほかの出版可能な稿本を同じで、本人は出費を避け、後代に上梓は任せたいものと思われる。収録された道歌はもととは童蒙の手引きを意図したもので、なにかの本を引き写したのではなく、石水が日頃耳慣れていた歌を書き留めたと思われる。『教訓歌選』は近世後期の伊勢商人がどのようなモラルをもっていたかをうかがうことができる重要な資料であり、実際に『教訓歌選』に示された道徳は石水の妻政子を通じて、孫の半泥子に受け継がれたことが確認できる。

はじめに

本稿では、江戸時代に江戸の大伝馬町で木綿問屋を営んだ豪商川喜田家の十四代目当主川喜田石水の文事から、教訓を五・七・五・七・七の短歌で記した教訓歌をとりあげる。具体的には、公益財団法人石水博物館所蔵の川喜田石水自筆稿本『教訓歌選』（館蔵番号一二七―一三）を翻刻のうえ分析し、その特徴と意義を記す。川喜田石水（文政四年（一

八二二）生々明治一二年（一八七九）没）の伝記および商人としての活動は、本稿の前号の『人文論叢』三七号（三重大学人文学部文化学科、二〇二〇）所収の拙稿「安政の大地震と一四代目川喜田石水の情報網」に記したので本稿では省略する。

川喜田石水の文事は多岐にわたっており、またいずれも質が高い。活動した分野を紹介すると、今回の『教訓歌選』を含む教訓歌のほかに、和歌・俳諧・川柳・漢詩といった自詠の詩歌。爾然・潭空・夏蔭・遠里といった先祖の歌を編纂した歌集。身の回りの出来事や故事来歴の記録や考証を行った随筆。京阪や江戸への旅行を記した紀行文。同時代の事件についての聞き書きや手紙を書き写した風説書。そのほか物産会や動植物の記録をした本草書。茶道に関する名鑑。などがあり、その活動は様々な分野に及んでいる。

生前、石水が版行したのは九代当主爾然斎の歌集『爾然斎玄無法師家集』（二巻二冊、文久元年（一八六一）跋、館蔵番号〇三九―一七）や所蔵している涌蓮法師の短冊を版木に彫りおこした『涌蓮大徳短冊帖』（嘉永五年（一八五二）刊、館蔵番号筆蹟一三―二、茶人の没年月日を記した一枚刷の『茶人帰西日録』（館蔵番号一三七―六七）である。これらは他人のための出版あるいは公共性の強い出版であり、石水が自身の著述を上梓することはなかった。

しかし、その著作を見ると当時の貴人・学者からの序跋を備え、本文も整った、出版を念頭においたとおぼしき稿本が存在する。おそらく版元に渡せば版行可能だったにもかかわらず、稿本の状態で留めおかれている。なぜ、そうだったのかは後述する。

随筆の『心の友』（館蔵番号〇一八二二六）に『心の友』（館蔵番号〇一八二二八）、紀行文の『旅窓漫筆』（館蔵番号〇一三〇〇一）に『旅窓漫筆』（館蔵番号〇一三〇〇四）、自詠歌集の『菅原政明和歌集』（館蔵番号〇三三三四〇）に『政明集』（館蔵番号〇三三二二〇）とそれぞれ前段階の草稿が存在し、段階を経て内容が整えられていったことがわかる。そして今回紹介する『教訓歌選』（館蔵番号一二七一一三）には『教訓百歌選』（館蔵番号一二七一一五）と『教訓ぬき書』（館蔵番号一二七一六）といった前段階の草稿が残っている。刊行されれば複数段階の草稿のうち古いものは破棄された可能性も高く、出版されなかったため、複数の草稿が残り最終稿までの編集の過程がわかるようになっていいる。『旅窓漫筆』（館蔵番号〇一三〇〇一）は出版できる形まで整えられているが、巻一の巻末に四つの広告が載る。

教訓百家選 合本 三冊

心のとも 校正 嗣出ス

旅窓漫筆 二編 嗣出ス

近世名家歌集 嗣出ス

これら四つを出版に価すると石水が見なしていたのがわかるが、さらに順番からいえば石水が大事にしていたのは、まず教訓歌、次に随筆、三つ目が紀行文、四つ目が名歌集だと言えよう。

川喜田家は代々和歌を学ぶ高雅な家であり、五世緑亭川柳からはその書簡で「歌詠」という評価を得ている。¹⁾ 川喜田石水の文事としてはまず

和歌をみるのが妥当であり、実際に『菅原政明和歌集』（館蔵番号〇三三三四〇）のように自詠の歌集の編纂もかなり進んでいたが和歌に関しては名歌を優先する態度をとっている。本居宣長の『鈴屋集』以前は歌人が生前に自分の歌集を出す習慣はなかった。石水の活躍した時代には自詠歌集を出しておかしくなかったのだが、石水は自分の歌集の編集を行ったものの出版を企図したとは言いがたい。かわりに九代当主久太夫光盛（号は爾然）（二六八五〜一七五五）の歌集『爾然斎玄無法師家集』（館蔵番号〇三九一一七）を出版している。館蔵資料では『教訓百家選』・『心の友』・『旅窓漫筆』二編（館蔵番号〇一三〇〇四の江戸編）・『今古和歌集』（館蔵番号〇四〇一二四〜二九）が『旅窓漫筆』広告の稿本に相当すると考えられる。

教訓歌について

教訓歌とは道歌ともいい、道徳的な教訓や精神修養のたとえを覚えやすい和歌の形式でわかりやすく説いたものである。仏教や心学の精神を詠んだものが多い。そして多くは婦女童蒙の教育のために編まれている。たとえば、古典文庫『中世近世道歌集』²⁾には若衆を対象にした宗祇作『若衆短歌』と宗祇作『児短歌』、女房を対象にした『宗祇短歌』、子息教訓のための『西明寺殿百首』、女子の教訓を記した『女訓集』が収められているが、道歌の主な対象がどこにあったかを如実に示す。『教訓歌選』の青谷外史の序文が言及する藤井懶斎『蔵筍百首』（万治年間（一六五八〜一六六二）刊）と津阪東陽『道の柴折歌合』（天保録年（一八三五）刊）（なお青谷は『道能枝折歌合』と記すが、『道の柴折歌合』が正しい）はともに婦女の教育を目的としたものである。藤井懶斎『蔵筍百首』は、妻を亡くした懶斎が残された女兒の教育のために、百人一首

や八代集から歌を選んで、解釈をつけ「婦道」を説いたものである。『道の柴折歌合』はもともと東陽が自身の娘ふたりのために教訓的な和歌を集めた『童女庭訓』をもとに編纂した書であり。歌を二首ずつ掲載し、その趣意を説明する形式をとる。以上のように教訓歌あるいは道歌とは啓蒙のための書籍だが、石水の教訓歌は特殊である。

『教訓歌選』と青谷外史

『教訓歌選』は青谷外史定憲、すなわち津藩士で藩校有造館の講官かつ画人でもあった宮崎青谷（一八一一～一八六六）に序文を乞うている。教訓歌・道歌はもともと婦女童蒙が対象なので序文もわかりやすく書かれており、『教訓歌選』のように漢文の序は他に見ない。また「然に石水は此篇自ら以て戒めとなすのみ。世に示すことを欲さず、將に余の一言を請うて笥に之を蔵さんとす。」という書き方から上梓の意図はなかったと思われる。

すなわち『心の友』・『旅窓漫筆』・『近世名家歌集』も刊行する意図はなく、あくまで出版前の形にするという遊び心だったのではないかと推測する。『心の友』の草稿段階のひとつに『招魂筆記』（館蔵番号〇一八一八）があり、その序文では遊びにきた友達が机の上の筆記をみてしばらく座って読み終わってから大いに笑って「この書は用なき物まれはとて捨られけき」と言ったので石水が「是を招魂筆記となつけしむ」と書名の由来が書いてある。序文の定型では遊びにきた友人が面白がつて持って帰って本にする経緯がしるされるのだが、ここでは用なきものと書かれているのがおかしい。この序文はのちに省かれるが、石水の文事は公刊を前提にしていないことがここでもうかがえる。

『教訓百歌選』序文

ただし、もともとの目的は教導にあったことは間違いない。『教訓歌選』（館蔵番号一二七―一三）の前段階にあたる『教訓百歌選』（館蔵番号一二七―一五）では違ったすがたがうかがえる。その序文は、

教訓百歌選序

悪事には流安く善事には流ぬてけれどもあしとして人を殺しものをとるのたくひにもあらねとむなしくあたらず月日を酒色に送ていつしか父母の異見も不用して通行子のかなしければ聊先哲のこの葉を集て幼姓を導く近路にもならんかしとかくかきつゝるぬしは神の都の市人

弘化二年三月 川喜田石水になん 印（名政明／字子清）

とあり、「先哲のこの葉を集て幼姓を導く近路にもならんかし」から他の教訓歌・道歌集と同じように童蒙の啓蒙という意図はあったように思われる。該書は序文までつけてあるが、全二八丁のうち一九丁のみ墨付であることや字の整い具合からすれば、やはり草稿段階であり、これを弘化二年三月に用意したもの、結局は諦めて宮崎青谷から自分のためとして漢文の序をもらうに至ったとみてよいだろう。

川喜田石水の文事と出版

なぜ、出版予定のないさまざまな稿本を石水が準備したかについて、次のような推測を述べておく。出版は費用のかかるものであり、自分の楽しみのために本を出すことは伊勢商人としての気質が許さなかった。しかしながら、内容を出版に相当するまでまとめることは編集の楽しみがあつたはずである。それより、石水自身が九代当主の歌集『爾然斎玄

無法師家集』を刊行していることから、すぐに出版可能な状態に残された稿本を子孫が出版してくれることを期待していたのではないかと考える。残念ながら、その後川喜田石水の著述が上梓されることはなかったが、写本ながら出版物と同じようにこうして後世の人間が楽しめるのはありがたいことである。

『教訓歌選』の構成

内容は三巻構成で、上巻百首と中巻百首が普遍的な教訓であるのに対し、下巻は道歌と題したように仏教的な思想の歌が多い。歌の詠み手は記しておらず、調べて注記したがわからないものも多い。世に流布している歌と字句が異なるものもある。序文では「頃日諸集を採取し」とあるが、手元にある道歌集から転記したのではなく、日頃石水が耳にしていた歌を書き記したものと思われる。有名な詠み手のものが書いていない場合もあれば、涌蓮（下巻五〇）や佐善元恭（上巻八七）のような伊勢や津藩に関係したものがあつた。川喜田家は浄土宗を信仰しており、法然の歌（下巻一・四五）がとられている。

『教訓歌選』と川喜田家訓

版木によって広く世に広められることになかった『教訓歌選』だが川喜田家の家訓として家中に影響あつたと思われる。たとえば、上巻「二四 そしられて身のあやまちを改めはその人こそは我師なりけれ」だが、これは石水こと一四代当主川喜田久太夫政明の孫にあたる、一六代当主久太夫政令すなわち陶芸家として有名な半泥子に影響を与えている。龍泉寺由佳「伊勢商人津・川喜田久太夫家の教養と半泥子」^③によれば、満一歳を迎える前に祖父政明と父政豊を亡くし、明治一二年（一八七九）

に一歳で家督を相続した半泥子は祖母政すなわち政明（石水）の妻に養育された、明治三年（一八九九）に成人した半泥子に政が送った長い手紙（政子遺訓）がある。そこには半泥子に対する心構えが記してある。大きく三つに分かれ、増長の戒め、食の戒め、旅行戒めの三つである。該当箇所を抜粋すると、

「何かよく出来候事あつて人二ほめられ候てもかならずく〜てんぐ二ならぬよう心得が第一に御座候、ほめられ候へはしらすく〜てんぐ二なり候物に御座候」

「一 食事の事あまりく〜大食ハあしく候間、是又よく〜御つゝしみなさるへく候」

「一 旅行致し候てもけんのんな所へは参らぬやうたのミ申候」といった文言が認められる。末尾は「われをほむるものハあくまとおもうへし／我をそしる者ハ善知しきと思へし、只何事にも我をわすれたるが第一なり、右ハ久太郎がわたしへ認くれ候うつし也」で締められている。久太郎は政の子である一五代当主川喜田久太夫政豊の名である。教訓としては増長を戒め、大食を戒め、危険な旅を戒める内容である。このうち、上巻二四「改心 そしられて身のあやまちを改めはその人こそは我師なりけれ」中巻一八「養生 気は長くつとめは賢く急薄く食細してこゝろ広かれ」が該当する。

以上のことから『教訓歌選』から川喜田石水および伊勢商人川喜田家の道徳がどのようなものであるか十分に知ることができると言えよう。

注

- (1) 早川由美「十九世紀伊勢商人の文芸活動——長井五鈴と川喜田石水の出版活動から——」(『国語と国文学』九一卷五号、平成二六、一三四頁)。
 (2) 池田廣司編『中世近世道歌集』(『古典文庫』昭和三七)。長歌・短歌など十五種十八作の道歌集を取る。
 (3) 龍泉寺由佳「伊勢商人津・川喜田久太夫家の教養と半泥子——石水博物館の所蔵品から——」(『茶道文化研究』第五輯、平成二五、七五・七六頁)。

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「石水博物館蔵資料を中心とした伊勢商人の文化サロンに関する総合的研究」(研究代表者岡本聡。研究課題18K02029)の成果によるものである。

【翻刻】

(凡例)

- 一、原本に丁付けは記されていないが、最初の丁より数えて表丁を「オ」、裏丁を「ウ」として丁付けを翻刻には記した。
 一、漢字は原則として現行通用の字体を用いたが、原本の字体を残す必要のあるものは、原本の字体のままにした。
 一、清濁は原本のままとした。
 一、□のついたふりがなは修正の書入れを示す。
 一、「教訓五十歌選」五〇首の下に合点がある場合「十」をつけた。
 一、鑑賞の便を図るため、各歌の前に漢数字の略記体で通し番号をつけた。
 一、各歌の作者が判明している場合は各題の下の丸括弧内に記した。

教訓百歌選小引

藤井懶斎氏の『藏笥百首』。与_二東陽先生道能枝折歌合_一。皆借_二古歌_一、説_二道義_一、使_二人感誦易_一入、雖_レ非_二歌者之本旨_一、善近取_レ喻。可_レ謂_二仁之方_一者歟。近世石田氏之道訓。亦多引_二歌詞_一。其婆心戒_二告世人_一者、尤深矣。友人河喜田石水頃日採_二取_一(1オ)諸集。選_二教訓百首_一、皆足_二以垂_二戒世人_一也。然石水此篇自以爲_レ戒已。不_レ欲_レ示_二之世_一矣、將_二請余一言_一藏_中之於笥_上。猶_二藤井氏意_一。所_レ謂古之學者爲_レ己者而教自存_レ内矣。亦以見_二其所志高_一於人_二等_一乃不_レ辭而題_二一言_一還_レ之。(1ウ)

弘化二年己巳開冬

青谷外史定憲識

門人某書(朱印)(2オ)

(漢文読み下し)

藤井懶斎氏の『藏笥百首』と東陽先生の『道能枝折歌合』とは、皆古歌を借りて、道義を説き、人の感じ誦うをして入り易しくせしめ、歌者の本旨に非ずといえども、善に近き喻えを取り、仁の方を謂うべきものか。近世石田氏之道訓。亦多く歌詞を引く。其婆心の世人を戒告すること、尤深し。友人河喜田石水頃日諸集を採取し、教訓百首を選び、皆以て世人を垂戒するに足る也。然に石水は此篇自ら以て戒めとなすのみ。世に示すことを欲さず、將に余の一言を請うて笥に之を藏さんとす。猶藤井氏意のごとし。謂う所の古の学者は己を爲する者であり、而して教の自ら内に在す。亦以て其志す所人より高き一等を見るに乃ち辞さずして一言を題し之を還す。

（余白書きつけ）

牛馬たとへ 元日の三休病気女房夜歩行食好芝居見勝負事なし、無言行
寝ても迷たるなし、虎の皮事にても外の事うらやまず

日火月水

光明遍照十方世界念^{ヲモヒタスケ}仏衆生攝取不捨

水上月ぬれぬ事

何もかも菩薩といふ事（2ウ）

教訓百歌選

光陰如箭

洞津 河北石水著述

一 はかなしや思へは日々の別哉きのふのけふに又もあはねは

後悔（串木野民謡さのさの一節）

二 をちふれて袖に涙のかゝる時人の心のおくそしらるゝ

示奢者

三 くみ捨し野中の水に影みえてあかるは落る夕雲雀かな

げたいなき心（徳川光圀）

四 見れはたゝ何の苦もなき水鳥の河にひまなき我おもひ哉（3オ）

壁耳

五 人はたゝよしといふこそ聞よけれそしらは耳に障子さすへし

樂は苦

六 何事もけふの飲樂過ぬれば必あすのくけんとそなる

一心定

七 ひと筋に心定よ濱千鳥いつくの浦もなみ風そたつ

還俗のいましめ 円光大師

八 何ゆへに捨にし舟そと折節はこゝろにはちよ墨染の袖

苦心にして可有知（一休宗純）

九 丸くとも一角あれやひと心あまり丸きはころひやすけれ（3ウ）

示奢

一〇 上見れば及はぬ事そ多かりき笠きてくらす己か心に

人面獸心

一一 牛馬は皆丑馬と呼るれと人こそ人とはれかねぬる

父憂子

一二 奥山に手折枝折は誰か為そ憂き世をすてゝ帰る子のため

老人 毛利兵橘妻

一三 浅ましの老やとむかし見た人を思へは今の我身成けり

女失

一四 花見むと急て小船に帆をあけて吹るゝ風の吹てあれかし（4オ）

心（沢庵禪師）

一五 心こそ心まよはす心なれ心にこゝろ心ゆるすな

養育

一六 思ひやれつかふも人の思子を我思子におもひくらへて

性善（日蓮上人）

一七 心から横しまにふる雨はあらし風こそ夜の窓はうつらめ

君臣和睦

一八 船と水中よくてこそ世は渡れ心のあらし浪風ぞうき

浮世

一九 思へたゝまればやかてかく月のいさよふ空や人の世の中（4ウ）

季候

二〇 何事も時ぞと思へ夏きてはにしき勝る麻のさ衣

人欲失道（高橋泥舟？）

二一 欲ふかきひとの心と降雪はつもるにつけて道をわするゝ

鶴一声

二二 村雀鳴さはけとも一声の鶴の心はなとかしらまし

読書

二三 君の為民の為とてまなはずは蜚も雪も何にあつめん

浮世

二四 明日は期ときのふ思ひし事もけふ多くはかはる世のならひ哉（5才）

隠士

二五 すてかたき憂き世なりとは誰々も背て後や思しるらん

短慮不成功（太田道灌）

二六 急かすはぬれさらましを旅人の跡よりはるゝ野路の村雨

一心不乱

二七 外からは手もさへられぬ要害を内より破栗のいか哉

苦身

二八 ひと筋のかひこの糸もいろゝに織てにしきの衣とそなる

教訓（弘法大師）

二九 人多き人の中にもひとそなき人と馴ひととなせひと（5ウ）

浮世（親鸞聖人）

三〇 明日見むと思こゝろのあた桜夜はあらしの吹ぬ物かは

読書 龜山院御製

三一 聚ては国の光と成やせむ我窓照夜半の蜚かな

清心（兼芸法師）

三二 姿こそ深山かくれの朽木なれ心は花になさは成なむ

丹精（上杉鷹山）

三三 なせはなるなさねはならぬなる物をならぬといふはなさぬ成けり

後悔

三四 心見る鏡としらて今迄は姿うつせし事を恥かし（6才）

思慮

三五 雪分て柴こる人も有物を侘とはいはし宿の埋火

悪

三六 かはかりのことは憂き世のならひそと心にゆるす科そはかなき

かんにん

三七 ともかくもたゝ其俣にみすこせはうきもつらきも安き世の中

心深

三八 奥山に心を入れて尋なは深き紅葉の色をみましや

ざんけ（凡河内躬恒）

三九 吉の河よしや人こそつらからめ早くいゝてし事はわすれし（6ウ）

かんにん（拾遺和歌集詠人不知）

四〇 手間くらのすぎ間の風もさむかりき身はならはしの物にも有ける

教訓

四一 みめあしく姿に花はさかすとも心に花をさかせ世のひと

示隠士（凡河内躬恒）

四二 世をすてゝ山に入ひと山にても尚うき時はいつち行らん

浮世示人欲（小沢蘆庵）

四三 ひとの世の富は草葉に置露の風を待間の光成けり

苦身 日蓮上人

四四 心から心にものを思はせて舟をくるしむる我身なりけり（7才）

浮世

四五 いつはりとおもはて人も契けん替るならひの世こそつられ

隠士 中将姫

四六 中々に山の奥こそ住よけれ草木は人の善悪をいわねは

後悔

四七 うゑさりし今壹本の悔しさは花咲頃の庭の秋萩

人のいましめ

四八 みのる程稲はふすなり人はたゝ重く成程そり返なり

禁人多弁（藤原良経）

四九 世の中のとら狼は何ならす人の口こそ尚勝りけり（7ウ）

かんにん

五〇 ひとの又くゝりて恥ぬかしこさに智者の鑑と今にほめられ

心はかるく持へし

五一 舟上りに上るひはりと見えけるもつひにはくたる夕暮の空

うけ付をいましむ（後撰和歌集、詠人不知）

五二 なきなそと人にはいゝてありぬへし心にとは、如何答へん

浮世

五三 霞をなとあたなる物と思ひけん我身も草に置ぬ計を

多弁をいましむ

五四 用てするはいはぬにしくはなしこと葉多きは災のもと（8才）

世上人氣

五五 世の中はとくして人にはめられて損して人に笑るゝなり

浮世

五六 そしるのもそしらるゝのも夢成を心に留て何うらむらん

教訓 前中納言定房

五七 ひと筋に人をも舟をも思哉うつ黒縄のすく成とのみ

教訓

五八 怠たりし我らそ人にあらすとも人にならなき子の行くゑ哉

知恩

五九 ひとの子の親になりてそ我親の思はいとくおもひたらるゝ（8ウ）

悔心（道元）

六〇 いたつらに過す月日は多けれと道を求る時そ少き

風流心

六一 まつ風のたゝく夕へは聞すてゝ音なき月に明る柴の戸

大丈夫（宗長）

六二 ものゝふの矢橋渡りちかくとも急かは廻れ瀬田の長はし

若木不無善悪

六三 心なき友ならんよりゆかしきは庭の草木の朝夕の露

善は急け

六四 降と見はつもらぬ先にはらへかし雪には折ぬ青柳糸（9才）

浮世

六五 憂き事は華にわすれて又ひとつ苦勞元めしあすの山風

憂子

六六 子は親の心つくしをしらすとの漕ゆく船の迷ぬる哉

人世の常

六七 あししともよしとも如何いゝはてん折々替る人の心を

あきらめ 慈慧元三大師

六八 うき事は世にふる程のならひぞとおもひもしらて何なけくらん

悟 隆宝律師

六九 さたかにも憂き世の事をさとりすは闇のうつゝに尚やまよはん

(9ウ)

人世 建仁雄長老

七〇 遁世のとは時代に書かへむ昔遁今はむさほる

学文

七一 いたつらに遊ぶ月日に一字つゝまなへは千々の宝とそ成

程々不過 冷泉為家卿

七二 よしさらは散迄は見ん山桜花の盛を面影にして

奢者不長住在

七三 草の葉の程々に置露の玉おもきは落るひとの世の中

酒は毒

七四 酒はたゝのまねは須磨の浦淋し過せはあかし浪風そ立(10オ)

示人

七五 栄花とはさかえて花と書なれはさひて乱て跡は散なり

季にたとへて人を示

七六 よき事はいつもあるそと思なよ夏暖ければ冬の寒よ

光陰如箭

七七 ゆく先を兎やせん角と思日のつもりて老の身とそ成ける

浮世

七八 なからへてはてはなにせんととも世の秋くる鳥の名こそ有けれ

同

七九 はかなさを先眼の前にしらすは籬の下の朝兒のはな(10ウ)

憂子(山上憶良)

八〇 白金も小金も玉も何かせん子にますたから世にあらめやは

客の長居いましむ

八一 いさゝらはいとまもふさん龍田山人の心に秋のこぬまに

主人の心

八二 秋の田に苅取稲のひと手草稲とはさらに思さりけり

示牛方

八三 小車のめくりこん世はおのれ又ひかれて丑と思しるらし

隠士 笠置解脱上人

八四 たち寄て影もうつさし流ては憂き世に出る谷河の水(11オ)

苦心 真阿上人

八五 しひの眼にくしと思人はなし科有身こそ尚哀なれ

示悪人

八六 する墨のゆかむも己か心から石の思はん事も恥かし

示人 佐善元恭(佐善雪溪、津藩儒)

八七 世の中はたゝかはかりの物そとをしらて深山を尋ける哉

隠士

八八 中々に事たらぬ舟は長閑にて春にも勝年の暮哉

悟 蟬川新右衛門妻

八九 浅糸の長し短しむつかしやうむの二つをいつか離れん(11ウ)

示愚者 仏国国師

九〇 雲晴て後の光と思なよ元より空に有明の月

示赫住 龍宗和尚

九一 いづくにも心とまらは住かえになからへは又もとの古郷

隠士好友

九二 隠家も折々人のとへよ猶憂き世のうさをきゝていとむ

かくれたるより顯はなし

九三 名き名そと人にいふへき我袖にかくれぬ物は夜半の移香

かんにん

九四 むねの火のもえたつ時の有ならは心の水をせき留てけせ（12才）

光陰如箭（源仲正）

九五 はかなくも我世のふけをしらすしていさよふ月を待渡る哉

かんにん

九六 世の中はたらぬ勝こそ嬉しけれ有に任よなきに任よ

正直

九七 舟は軽く心素直に持ひとはあふなそふてもあふなけもなし

後悔

九八 孝々のしたひ時分は親はなし世に有内に孝行をせよ

示奢

九九 きぬよりは木綿ものをはさつはりとされる姿そ奥ゆかしけれ（12ウ）

（題なし） 松平右近将監

一〇〇 われもまた秋の衣にきかへけり何世を急ぐ日暮しの声

教訓百歌選終（13才）

教訓五十歌選

光陰如箭（古今和歌集、詠人不知）

一 きのふこそ早苗ともしかいつのまに稲葉そよきて秋風ぞ吹

不悪人

二 しら浪も寄くる方に返る成人を難波のあしとおもふな

身を慎め（賀茂成助）

三 いかはかり人のつらさをうらみまし憂き身の科とおもひなさすは

後悔（藤原実定）

四 をしへ置其ことの葉を見る度に又問かたのなきそ悲しき（14才）

悪人（北条泰時）

五 世の中に麻は跡なく成にけり心のまゝのよもきのみして +

老人

六 かさせとも老はかくさて梅の花いとゝ頭の雪と見得つゝ

子教訓（寂蓮法師）

七 牛の子にふまれな庭の蝸牛角あればとて身をは頼みそ +

御慈悲（九条良経）

八 おほふへき袖こそなけれ世の中の貧しき民の寒きよなくゝ

老人

九 しるらめや子を思闇の夜の鶴我世更行霜になく声

子孫知親恩 前大納言基良公

一〇 たらちねの心の闇をしる物は子を思ときの涙なりけり +（14ウ）

忘智恩 有徳院吉宗公

一一 請つきし国の司の甲斐もなしめくまぬ民に恵るゝ身は

心 北条時頼

一二 いく度も思定て替らむ頼ましきはこゝろなりけり +

浮世

一三 とまかくも流るゝ水にまかせなは安かりぬへきちりの世の中 +

〃

一四 なけきつゝきのふもけふも呉竹のうきふしことにいとふ世のなか +

可出精

一五 子を思親の心はくらけれとみかゝは玉のひかりをやみん
幸

一六 傾城かあちらむくとてはらたつな誠にむけは城のかたむく
(15才) +

こらへ(一休宗純)

一七 世の中はのり合船のかり住居よしあしともに名所きうせき +
養生

一八 気は長くつとめは賢く急薄く食細してこゝろ広かれ

人常(祇王)

一九 萌出るも枯るも同じ秋の草何れか秋にあはてはつへき

気の毒

二〇 毒多き毒の中にも気の毒は何より毒なものでこそあれ

孝

二一 何事も親の心にかのへ申これからしんのひとゝいふなり

養生

二二 いたきはり苦き薬にあつき灸くるしまんよりかねてつゝしめ (15ウ)

浮世

二三 埋火をよそに見るこそかなしけれ消れは同じ灰と成もの

改心

二四 そしられて身のあやまちを改めはその人こそは我師なりけれ

他力

二五 さりともと寝ても覚ても頼哉愚なる身を^{みた}神にまかせて

養生

二六 朝は粥屋は一菜湯は茶つけ寝酒もあまり過ぎぬそよぎ

光陰如箭

二七 つく／＼と思心にひゝくなりけふは誰か身のいりあひの鐘
国恩

二八 何事も暮におとる世の末にまざるひとつやくにのしつけさ
(16才) +

再出

二九 降と見はつもらぬ先に払へたゝ(し?) 風吹(有?) まつに雪折
はなし +

少欲知足

三〇 足る事をしれは心ものとかなりなとて迷ふてかはかりの世に

隠士

三一 かく計すつれはやすき世中をなといまゝてはそむかさりけん

悟

三二 はかなきをまつ目のまへにしらするに籬の上の朝兒の花

戒多弁

三三 言やせましいはてはあらん思ふ事言ぬは言にまざるなりけり +

光陰如箭

三四 長生は願へと朝寝うたゝねは年月ちゝむ日かすしらすや (16ウ)

戒多弁

三五 人の事我に向て言ひとはさこそ我事ひとにいふらめ +

可改心

三六 顔や手のよこれは常にあらへとも心の垢をすゝく人なし

老人

三七 行先をとやせん角と思ふ日のつもりて老の身とそ成ける +

悪人

三八 くらやみに眼のある事をしらすして宝とられにはひる盗人

憂子（藤原兼輔）

三九 ひとの親の心は闇にあらねとも子を思みちにまよひぬるかな

隠士（兼好法師）

四〇 住はまた憂き世なりけりよそなから思ひのまゝの山さともかな

（17才）

迷心 三井寺公朝

四一 偽りも誠もともになかりけりまよひしほと心のこそにて +

善心

四二 ひと声の時鳥よりきゝたきはまことの道をかたる世の人 +

浮世

四三 ちらぬ間とやまの桜や思ひたつ花よりもろき命わすれて

ひかめ

四四 帰る鳶雲井はるかになりゆくを霞にきゆと見るかはかなさ

浮世（古今和歌集詠人不知 942）

四五 世中は夢に隠るうつゝとも夢ともしらす有てなければ

清心（能蓮法師）

四六 石清水清き流のたえせねはやとる月さへ濃かりけり +（17ウ）

浮世

四七 しはしとて待へき物か稲妻の光の間なるひとの命は

太平

四八 小手の上にふりし世しらて厚衾重て夜半の霰をそきく +

浮世

四九 長かれと何思ひけん世の中のうきを見るはいのちなりけり

辞世 蒲生氏郷

五〇 かきりあればふかねと花は散ものをこゝろ短き春の山かせ

教訓五十歌選終（18才）

教訓五十歌選 二首附録

道歌部

洞津 河北石水著

ざんけ（源空上人（法然））

一 雪の中に仏の御名をとふればつもれる罪もやかてきえぬる

浮世

二 いまとてもしらぬ命になすことは皆百年の世をわたる業

深一筋

三 くむひとの深さあさゝもなからまし同しなかれの吉水の末（18ウ）

法心

四 世の中は唯うかゝとくらすなら鐘と衣をたしなんておけ

真心

五 さとり得て心の闇の晴ぬればしひもなさけも有明の月

悟

六 念仏もしひて申はいらぬ事もし極楽をとふり過ては

あきらめ 明恵上人（鎌倉初期の華嚴宗の僧）

七 いつまでも明ぬ暮ぬといとなまん身は限りあり事は尽せず

隠士 性山上人（江戸中期の僧。天明五年没）

八 かけはしのあやうき世をはのかれきて舟の上軽し木曽の麻衣（19才）

清心

九 誰なりと四方八面うつて見よ慈悲の姿に当る敵なし

仏道慈悲

- 一〇 ひとこゝろ丸きか上に丸かれとくるくまはせ此珠数の玉
法身 熊谷蓮生法師
- 一一 古しへの鎧にかはる紙子さへ風のいるやもとほらさりけり
仏道迷心 大愚禪師
- 一二 知れは迷ひ知らねは迷ふ法の道何か仏の誠なるらん
后世 明恵上人
- 一三 さまぐに憂き世のしなはかはれ共しにるひとつはかはらさりけり(19ウ)
悟 法心上人
- 一四 あしなくて雲のはしるもあやしきに何をふまへて霞たつらん
浮世 袋中上人
- 一五 井の端にあすふこよりもあふなきは後生願はぬ人の身の土
他力
- 一六 あららくやちかひの船に帆をあげて櫓櫂もとらて寝たり起たり
法心
- 一七 打はやすつゝみ太鼓の声よりも念仏の声をきくそたのしき
他力
- 一八 約束の念仏はもふしそふらえやろふやらしはみたのはからひ
(20オ)
他力
- 一九 口にあるなむあみた仏の味わひは自力の人はしらぬ成けり
真心
- 二〇 名聞にくらむ長者の万燈にまさるひかりのひんの一燈

欲身

- 二一 夜なぐの夢にならては舟の上のうきをわする、思ひ出もなし
安楽
- 二二 あらよくやこくうを家と住なして心にかゝるぞうさくもなし
法身(二休宗純)
- 二三 六親の為と思はゝ出家して現世後生の道行をせよ(20ウ)
教訓
- 二四 願はゝよき事はせあしき事は二世のさりとふかくつゝしめ
命終意志
- 二五 つゝめとも人の心のよしあしはかきりの時にあらはれそする
真心鏡
- 二六 つれくゝと心の影をうつし画の鬼も仏も筆のまにくゝ
悟
- 二七 極楽ははるけき国とおもひしに惟ひと声の内にゆく也
仏道
- 二八 うれひある其時計世の人はあひにひかれて御名やとなふる(21オ)
浮世
- 二九 このねめるよの間にいきのたえやせむ御名をとなへて誰もまともめ
全
- 三〇 稀にたにかへる人もなき庵なれと御名唱ふれば淋しくもなし
全
- 三一 まほろしの世には心をとめすして後の闇路を早く驚け
全
- 三二 後の世をはるけきこと、おもふ哉みな眼の前に行をみなから

悟

三三 誠して仏の道を尋れば皆世の常のこゝろなりけり（21ウ）

浮世

三四 月も日も西へくと入相のかねてそしらすゆら人のみち

清心

三五 仏とは何を岩間の苔清水惟慈悲心にしくものはなし

全案心

三六 世を渡る橋と思てふみみしに誠の道にいるそ嬉しき

すゝめ

三七 たゝもふせ申うちにはおのつから深き仏の実国をそしる

さとり 千代能姫

三八 とやかくと工みし桶の底ぬけて水たまらねは月もやとらし（22オ）

自力 無經法師

三九 我法は柳の糸のもつれ髪とくとかれす云にいわれす

浮世 元和帝御製

四〇 あれを見よ鳥辺の山の夕烟それさへ風にをくれ先たつ

命終 酉誉上人

四一 ひとりきてひとりさりぬる道なればつれても行すつれられもせず

善知識 板倉氏女

四二 生れきて親にはかなき世をしらせ教て返子は知識也

教訓

四三 しんてから仏になるもよけれども生たる内によき人になれ（22ウ）

あきらめ

四四 かねたゝきかねりなき故鉦たゝく金があるなら鉦はたゝかぬ

案心（法然）

四五 阿弥陀仏と十声となへてまゝとるまん長き賤になりもこそせめ

仏道心得人々 諦忍律師

四六 濁すなよ代々にたへせぬよし水の清き流の末をくむ人

全（鴨長明）

四七 そりたきは心の中の乱髪つむりの髪はともかくにも

案心

四八 極楽は日にく近く成にけりあはれ嬉しきとしの暮哉（23オ）

教訓

四九 後生をはねかわけ^{（下）}とても第一はしひと情と施とみち

浮世 涌蓮

五〇 野辺みれはしらぬ烟のけふもたつあすの薪や誰身成らん

附録 疑心人に示

五一 たること^{（下）}はしれは心も長閑なりなとて迷ふそかはかりの世に

他力

五二 手とあしはいそかしけれと南無あみた口と心のひまにまかせて

教訓五十歌選 道歌部 終（23ウ）